

# Combined Fleet Girls COLLECTION FAN BOOK



おしっこれくしょん 潜水艦編

PISS-COLLE SUBMARINES



Volume 11 for ADULT ONLY

# 潜水母艦大鯨の日記より

いよいよ、私もかつてのように、軽空母龍鳳へと改装されることになった。着任以来、潜水母艦として、“昔”は満足に果たせなかつた潜水戦隊旗艦の務めを、自分なりに全うしてきたつもりだ……潜水艦娘たちの保母さんみたいなものだとしても。それなりに充実した日々だったけれど、緊迫の度を増す戦況は容赦なく、非力な私をも前線へと駆りたてる。

今度こそ、敵を打倒できるのだろうか？　そもそも深海棲艦とは何なのか？　いや、私たち艦娘こそ、いったい何なのか？　近頃、鎮守府の誰もが、そんな思いを押し殺しながら、日々を必死に生きているように見える。張りつめた空気にあてられて、時々、潜水艦娘たちを連れてどこかへ逃げ出してしまいたくなる。でもどこへ？　私はともかく、およそ人間とも、他の艦娘たちともかけ離れた存在である彼女たちに、ここ以外行き場所——生き場所なんてあるの？

そこまで考え、思った。私は、潜水母艦大鯨は、いったいどれほど潜水艦娘たちを理解しているのだろうか？　なかば本能的に懐いてくれる彼女たち。時に求め、求められ、他の艦娘どうしのように肌に重ねもする。身体じゅうからあらゆる水気を跳ねちらし、昂り、乱れ、果てる。それでも、海面の上と下とに、私たちはどうしようもなく分かれてはいる。心も身体も、近くて遠い。改装されれば、きつともう、隔たりはとりかえしがつかなくなる。——いま一度、潜水艦娘たちを深く、深く知りたいたい。私自身のことも知り尽くして、そうしてずっと覚えていてほしい。潜水母艦大鯨がいたことを。ひとしきり涙にくれたあと、私は潜水艦寮——ブンカーへ向かった。

「思い出づくり、ねえ」イムヤ、と呼ばれる勝ち気な少女が私を見て口を  
とがらせる。「あなたのことを忘れるわけがないのに」私が着任する前、潜  
水艦娘のリーダー格だったのは、昔も今も一番古株で、唯一のネーム  
シップである伊一六八。イムヤ、イクといった通称も彼女の発案だ。陸  
で過ごすのもあまり厭わないイムヤがいなければどうなっていたことやら。  
キュロツド型の「陸」での勤務服が、快活な彼女にはよく似合う。「はあ  
……男の子みたいでかわいい♡♡♡」「悪かつたわね、つるぺたで！」

胸部装甲・陰部

「うっ」「ああもう、ヒトを脱がせておいて鼻血だばあする  
んじゃないわよ！ ほら、んりしなさい」「んり♡」「もう」  
改めて、イムヤの裸身を観察する。ほとんど駆逐艦並といっ  
ていい、盛り上がり欠け、乳首ばかりツンとどがった発達  
途上なおっぱいはかなりコンプレックスらしい。下のほうも  
陰毛はまるで薄く、まだ色づいていない割れ目が丸見えだ。  
「こんな身体を水着一枚で覆って一日の多くを過ごす彼女たち  
殿方にお目にかかるのはもったいなさすぎる。」

下着姿

コホン。わ、私はロリコンではありません。ただかわい  
いものに対しての感受性が強いだけ。「そんな鼻の下、伸ばして何言っ  
てるんだ」「だってこの下、ささやかなお胸を包むかわい  
いブラ……全然お揃いじゃないトランク  
ス型のほんつも、こうかはばつぐんよ♡♡」  
「ダメだこの人」



# 性器

「こんなところ……何度も……見て、触ったでしょう」「何度だって、見て触りたいの」「クリトリリスも小陰唇も膣口も小さい、色素だつて薄い、幼い性器を広げながら、熱に浮かされたようにイムヤが訴える。どこか他の艦娘とは違う潜水艦娘たちの身体とのメンテナンスは明石さんでさえ難しく、半分以上は私自身が受け持っていた。その過程で、まあ、そういうことにもなつた。「ここ、かわいい」「んっ……包皮の下からわずかに顔をのぞかせる突起をかすかに撫ぜると、イムヤが震えた。「大鯨のえっち……」「イムヤだつて、いつも私の」「う、うっさい！」「沈黙が流れる。「……そんな縁もなかつた大鯨を、母艦として慕つてくれで、ありがとう」

# 放尿

潜水艦娘は「陸」に止がると決まると、野外で用を足したがる。普段、排泄も水中でそのまま……という習性のため、強い執着があるらしい。「陸上行動に慣れているイムヤとおでかけすると、彼女は必ず私の前でおしっこをする。でも……水着のおまをめぐつてなんて、初めてなんだけど!?」「一度ね、見てみたかったの♡」しよるはよろしよる……わずかに開いた小陰唇のあいだから、ほとぼは尿。「はあ……♡」「うう……大鯨のも、見せてもらうからね？」

# 自慰

たぶん重雷装艦の北上さんや大井さんに匹敵するくらい、潜水艦娘たちは魚雷好きだ。こんなふうには自慰に用いるくらいじゅぼ、じゅぼと音を立て、透明なから白く濁つたのまで、あたりかまわず愛液が滴る。「イ、イくところ、見てっ」「うん」「あたしのこと……忘れ、ないで……！」長い絶頂の余韻のあと、イムヤがつぶやいた。「あなたが教えてくれた、気持ちいいこと全部……忘れな」。「うん」「飛龍さんたち、きつといいなだから」「うん」「でも、むしいじめられたら、いつでも呼んでね。魚雷投げつけに行つてやるから」「うん……」「な……泣がないでよお……」

# 伊8 巡潜Ⅲ型二番艦

## 陸上軍装

「そう。あなたも、昔と同じ道をたどるのね。私を抱き寄せた耳元で、ささやく、はっちゃんの声が心地よい。開戦前後、三潜戦の僚艦で、自身も三潜戦旗艦を務めたことのあるあつた旗艦設備もちのはっちゃんは、潜水艦娘では一番気心が知れている。……最初に身体を重ねた相手でもある。ふかふか、ドイツ艦娘の夏服をカスタマイズした陸上軍装の、豊富な胸元に顔をうずめる。『…Cute Reise, mein Liebling.』『…ダンケ』」

## 下着姿

はっちゃんも、しばしば陸上で勤務する関係で、持っている下着の種類は多い。むっちりした身体を包む、甘めの下着は、とてもかわいらしく、エロティック。阿賀野さんたちと六緒に選ぶんだとか。私賀今度、千歳さんや千代田さんに誘われて、仲良く、なれるかな。

## 胸部装用・陰部

「あら」思わず声が出た。「はっちゃん。お手入れ、サボってるでしょう」西洋の人みたいで、いつもきれいに処理しているはずのはっちゃんの下腹部を、柔らかい陰毛がうっすら覆い、キラキラと光を反射している。「最近、忙しかったもの」意味ありげに微笑むはっちゃん。「ね……久々に。剃つてくれる？」



# 性器

「一度よく、見せてね♥」剃るのに傷  
つけどらいいけないから……なんていう  
お互い見え透いた口実で、はっちゃん  
のおそをを広げる。いやらしくてすて  
のあそこを黒ずんだヒダヒダや、勃  
起きると肉厚の黒ずんだ顔を出す大きめ  
起すお豆さんに、何度触れたり、吸い  
のたりしたことで、唇をどう押さえなが  
が生えて、陰唇をどうつぶつても、ひ  
刀をあてるか、目をつぶつても、ひと  
つも間違えない自信がある。

# 剃毛

しより、しより……やさしくやさしく、  
刃をあてていく。本物のドイツ人みたいに  
色白なはっちゃんの、いっとうデリケート  
なところは、すぐに赤く腫れてしまうのだ。  
そして……「ん……ッ」すぐに、濡れはじ  
める。「クリーム使わなくても……おっゆ  
だけで、剃れそう♥」「んもう、馬鹿……」

# 放尿

陰毛を剃り終えると、はっちゃんはいつもおしっこを出す  
二ん……出るわ」「いいわよ……いっばい出して……♥」  
はふ、とはつちやんが切なげな吐息を漏らすや、興奮して  
すっかり開いた秘部から勢いよく、きれいな尿が吹きだ  
した。ごくごくきゅつと、わざとらしく、品な音を立  
私は嘔下する。「はつちやん……潜水母艦に……補給して  
おしっこを逃すまいと、最後のほうは、勢いの弱まった  
が終わるまでの十秒ほどで、私はあっけなく果てていた。

「これが最後……なんて、言わないわ。だからこの言葉を  
Auf Wiedersehen、はっちゃんのあそこを剃って、お  
しっこ飲むのは、龍鳳になっても、あなただから」

# 巡潜乙型三番艦 伊19

## 外部装甲

ブンカーで見つけたイクは、妙に息が止がっていた。そして……外部装甲の股間と左手に粘液をまとわりつかせていた。「あなた……何してたの」「んっふー。気晴らしに」そこで深海ども、始末してきたところなのね」とカツカしているから、大鯨の教えてくれたアレ……シてたの！」哄笑するイク。彼女は、まさに、別の理が支配する世界に住む、潜水艦娘の象徴だ。

## 胸部装甲・陰部

イクは陸上軍装も、下着ももっていない。ブンカーや入渠ドック以外、ほとんど二十四時間、海の中にいる。陸の空気が、身体にまとわりつく感覚が嫌いらしいのだ……彼女の言葉を、私なりに翻訳した限りでは、提督との意思の疎通すら困難だったイクに、かろうじて人間味のかげら程度は持たせることができた、と思うのだけど、私が潜水艦隊を去ったあと、彼女は座るのだから……などと思いつつ、全裸で座りこむイクの豊満な胸部装甲と、生い茂る陰毛を眺めていると、突然彼女は放尿した。「あっ！ 陸」にいるときは、おしっこはトイレでするように、言っているでしよう！」「イク、いつも海でしたいときにしてるのね！ 陸は不便、キライ！」



# 性器

最初、イクを「陸」に慣れさせようとしたときもずっとこの調子で、提督の執務室だろうと何処だろうとかまおぼず催したらその場で用を足したりいきなり自慰を始めた。提督は大興奮していたものの、一部の駆逐の子たちが怯えてしまい、やむなくイクには水中ぐらしを認めることとなった。それほど、私たちとは隔絶しているのだ。……

「さあ、おまたも拭くから、足広げて」「くばあ、なのね!」「こ、こらづ」「んっふー、だつて大鯨はイクたちのおまた、大好きなのね」「それは……お前は、好きだけど、イクの、ふるぶるで厚ぼつたい、おまたは……」「ん、鯨が……そんなふうには、ふきふきするからあ」「もう! 膀胱ゆるすぎよ!」



# 放尿

「むずかるイクをブンカーのトイレへ連れていき、便器に座らせた。」「ほら、足開いて。言ったとおりにおじっこ、しーってしなさい。終わるまで見てるからね」「うう……これ、ヘンな感触!」便座が、気になるのか、なかなか出ない。「仕方ないわね……手を伸ばし、陰核包皮のまわりを少し刺激してやると」「あー」ちよるちよると漏れだしたおじっこが、すぐにふしやあ、と激しい水流になった。」「んっふう……おじっこ、いっぱい出たの」「ん……ちやんと、しーしーできたわね……私がいなくなっても、トイレ、するのよ」

# 自慰

「さつき、イけなかつたの……」という訴えに応じて、手を貸した。イクが私の左手をとり、そこへ導く。私の指が、彼女の膣を激しく貪る。「あー、あつっ」だからだと涙や唾液や愛液を垂れ流す。こういうときの彼女が、いちばん、私たちに近い存在に感じられる。「大鯨……気持ちよくして……くれるから……大好きなの! これからも、ずっと、大好き……なの!」「私も、イク、大好きよ!」「んっ……イク……のオッ!」





陸上軍装……？

少し前の話をする。ろーちゃんはまだドイツ籍Uボートのままで、とりあえずユーちゃんと呼んでいたところだ。人見知りの激しかったユーちゃんは、終戦直前の呉や舞鶴で顔見知りだったというシオイちゃんにだけは懐いていた。いや、懐こうとしていた。問題は……当時のシオイちゃんは誰にも心を開こうとしないが、たのだった。天真爛漫に振舞う今では想像もできないけど。

シオイちゃんには戦歴がない。ウルシー環礁を攻撃すべく初出撃した、その途上で日本が降伏したからだ。そのことが、大なり小なり昔、戦った艦娘たちのなかで、彼女の自尊心を深く傷つけていた。「私たちは心を痛めた。戦えない悔しさもまた、皆よく知っていたから。悩む私に「裸の付き合い」での解決を提案したのは、霧島さんや青葉さんだった。彼女たちには幾人かの艦娘の心を開かせた実績があった。

UボートIXC型四十五番艦

U-511

もとより、シオイちゃんはそこらから、上半身裸でうろつく習性があった。下は陸上軍装として選んだ短パンか、パンツ一枚。胸も膨らみはじめているのだ。そういうのは……と言っても、暗く翳った眼差しを投げつけてくるだけ。おまけに何を思ったか、ユーちゃんまで上着を脱いで、鬱々とひとり遊びに耽るシオイちゃんについて回りはじめた。肌が真っ赤になっただけ、辛そうなくらいユーちゃんを無視するシオイちゃん。あ

胸部装甲・下着姿



るとき、シオイちゃんのあとを追うユーちゃんが「陸  
ですつ転んでしまい、赤く腫れた上半身をしたたかに  
擦りむいて泣いてしまった。それでも無視するシオイ  
ちゃんを、さすがにきつく叱ったけれど、同時に「裸  
の付き合い」を実行する機会だと感じた。私は二人を  
連れてドックへ向かい、ユーちゃんの手当てをして、  
それから青葉さんたちのやったようにした。……スポ  
ブラさえ付けない、まったく発育途上の肢体と子供向  
けのパンツに、自分でも呆れるくらい私は興奮した。  
それを二人に正直に伝えた。こちら胸襟を開くのが  
大事なのだと、青葉さんは言っていたから。

## 陰部

やがて全裸の潜水艦娘二人が目の前に立った。二人とも無毛。の割れ目しかそこになかった。けれど、  
高身長でやや肉付きの悪いシオイちゃんと、小柄だけど尻が大きく、下半身のむっちりめなユーちゃん  
では、割れ目のかたちも違う。かわいさ半分、欲情半分で、私は記録を撮りつづけた。二人も照れながら、  
お互いの身体に改めて興味を持ったようす。少し、身にまとう空気が変わりはじめているのを感じた。



完全に変態だ、と思いつつ、三人の若い性器も見た。クリトリスも小陰唇もまるで未発達で、全体に淡いピンクから、口の中と同じように赤みがかつていた。膣口など私の小指すら入らなそう狭さ。そこを見られることはとても恥ずかしいことだと、おぼろげに理解はしている彼女たちがとてもエロい。私は丹念に触れながら、排泄以外の「使い方」を教えた。

### 放尿

性器を刺激され、尿意を訴える二人を船台の上に並んで腰掛けさせた。上着だけを身につけ、下半身は裸のパンツを膝まで下ろした。少し前は別人のよう豊富な表情になって、少し前とは別人のよう豊かなくなってきた。いっしょにおしっこを出さずと、動揺と羞恥と、圧倒的な興奮が二人の頬を朱に染める。



呂号潜水艦

500

陸上軍装

伊58 巡潜乙型改立 三番艦

「あつちー！ あつちー！ 一緒に『はだかあそび』するって！」 「もう、わかっ  
たから押すな！ あつちー！ 一緒に『はだかあそび』するって！」 「もう、わかっ  
ちやんとお揃いの陸上軍装を着て、子犬のようにはしゃぎ回るろーちゃん。まさか、  
あの優げ美少女だったユーちゃんがかこんなふうになるとは……シオイちゃんと仲良  
なつてよく笑うようになったところだ。さえ予想だにできなかった。」

何故か「でつち」と呼ばれ、シオイちゃんの比じゃないくらい懐かれてるゴーヤ  
ちゃん、口では邪険にしつつもほつとけないようす。シオイちゃんと並んで、「若い  
彼女は、いろいろ特殊なシオイちゃんを除けば潜水艦娘の末っ子のようなもので、  
見た目もどこか、イムヤたちにかわいがられてきた。シオイちゃんやろーちゃ  
んとあわせて年少組といったところか。ただ……若い艦ほど、上の世代が知り  
得ない、過酷な戦争体験を持ち合わせていた。ろーちゃんも懐いたのは、実  
のところ、シオイちゃんと同じ匂いを嗅ぎつけたからなのかもしれない。」

胸部装甲・下着姿

ユーちゃんにはろーちゃんになつて、身体も少し  
成長した。今ではブラをつけ、子供パンツも卒  
業して少し小さい、おしゃやれなシヨーツをは  
てている。ビスマルクさんやオイゲンさんが寄つ  
てたかって選んだ逸品だ。内輪で固まりがちな  
潜水艦には例外的に、ろーちゃんはドイツ艦コ  
ミュニティで水上艦ともよく交流している。



潜水艦娘で一番かわいい  
下着をつけるのはゴージャ  
ちゃんだ。イムヤやシオヤ  
イちゃん、まるゆちゃん  
は色気がなく、はづちゃん  
んはかわいというより  
エロ下着、イクに至って  
はそもそも持っていない。  
ろーちゃんはまだ下着に  
着られていたので、将来  
に期待といたったところ。

# 陰部

「大鯨のロリコジ……」赤面しつつジト目で睨むゴーヤちゃん。「へへ、すっぱんぽい!!」ですって!「ろーちゃん、もともと  
安産型だった腰つきはますます女らしくなり、胸も少し大きくなった。そして、ユーちゃんだったころすでに産毛が伸びはじめ  
ていた恥丘にははつきりと陰毛が生えつつある。でも、無毛のゴーヤちゃんとおんなじで、まだロリロリしい割れ目が丸見え。  
艦娘の成長曲線は、人間と同じようなカーブを描きつつ、いきなり段階的に伸びたりするのだ。」



「くばあ、ですって」「大鯨……それでハアハア言ってるのはさすがにどうかと思うでち」「だ、だつて……♡」私は  
かわいいものに対する感受性が強いだけ。こんなかわいい女の子の、かわいいところを見て、感銘を受けないほうがど  
うかしているわい。「かわいいでちがコレ……？ ひだひだがぐねぐねして気味悪いよ。イクや大鯨のなんか黒っぽいし」  
「お、大人はそうなるの！」「大鯨、大鯨！ ろーちゃんの、Muschi……じゃなかつた、おまんこ、かわいい？ なめた  
くなるキヤラ？」「あんた……」にナニ教えやがつたでちか？」「い……いえ性教育というかア、ニメ教育というか」「ドン  
引きでち……リンホースで特攻して星になつてしまえでち」「うう」「ねえ！ ろーちゃんの！ おまんこ！」

「とっ……こっ……」 「いけない！」

どうか、ゴーヤちゃんのパニック発作を抑えられた。裸のまま、がたがた震えながら、荒い息をしている。……  
戦争末期、連合軍に対しては、手も足も出なくなつた陸海軍は、兵士の死を前提とした特攻作戦によつて、なお敵を  
撃滅せんとした。ゴーヤちゃん……伊号第五十八潜水艦は、人間が乗りこむ超大型魚雷、回天を搭載し、生涯四度の出  
撃で計七基を発射。彼女はこれまでに着任しているなかで、唯一、昔、実戦で特攻兵器を運用した艦娘なのである。  
……その深すぎるドラウマから、ゴーヤちゃんは、まだ完全に立ち直れたわけではない。彼女のごとは、軽空母に改装さ  
れるにあつて、私の最大の心残りだつた。「でつち……？」「だい、じよぶ……」心配で泣きそうなるーちゃんに、  
ゴーヤちゃんが無理やり、笑顔を向ける。「ねえ……呂号、おしつこ、見たいでち」「……うん」

### 放尿

何度か、こういうことはあつた。不思議と、おしつこはゴーヤちゃんを落ち着かせるキになる。彼女にさせることも、私やイムヤが披露してあげることも。これがはじめての、ろーちゃんにも教えてある。「大鯨」「なあに」「うしろから抱つこして。おまんこからおしつこが出るところ、でつちによく見せてあげたい、ですって」「わ、わかつたわ」







大井です。突然ですがすこぶる機嫌悪いです。ただでさえ入渠のタイミングの関係で北上さんとスケジュールがずれてしまい、ひとり鬱屈したオフをすごしているところに、**ゆ**を押しつけられたんですから。**ゆ**——陸軍生まれの潜水艦娘・まるゆを連れてきたのは、彼女の飼い主かなにかのようになっている我が妹・木曾。前線基地への輸送で数日空けるのでというから、だつたら大鯨さんに預ければいいじゃないと言つてやつたら、妹は嫌味なほどサマになる仕草で頭をかきながら、神妙な口調で告げました。「何度か話して、確信したんだが……こいつに『昔』マニラで失礼なこと言つた球磨型って、俺じゃなくて大井姉さんなんじゃないか?」……へ?

木曾いわく、まるゆの1号艇が風雲急を告げるマニラへ到着したのは昭和十九年の七月十八日。木曾自身当時のことはもう覚えただけど、どうにもまるゆに会つた気がしないので天龍と一緒に資料にあたつたところ、その時期、軍艦木曾は横須賀にいたらしいとか。かわりに、十六戦隊で青葉や鬼怒、そして北上さんと同僚だった私が、敷波といつしよにマニラを出港したのがその日だとわかつたそうです。しかも私、次の日には潜水艦に攻撃されて沈没したんですって。「ふうん」としか言いようがありませんでした。私、昔のごとは木曾以上に、ほとんどなんにも覚えていないし、別にそれでかまわないんです。

胸部装甲・下着姿

北上さんがいないと二日中誰とも回を利かずに過ごせちゃうくらいネクラな私に、**ゆ**なんて、空母に潜水艦と戦わせるようなもの。でも、妹に頼まれたからには引き受けなくちゃ……。というわけで、部屋で放し飼いにして、いつしよにお夕飯食べると、夕方にはお風呂に入れました。まあ、睦月型の子たちよりはるかに、女体型で、正直木曾の性的嗜好が心配になります。

陰部

うーんこのつるべた。洗い流しながら、思わず股間に無遠慮な視線を向けます。別に私、女体型や、女が好きなんじゃなくて、北上さんが尊いだけ。彼女が今でも鉄のカタマリだったとしても変わらさず愛せます。「……あの」「なによ」「気にならないんですか?」「昔、のこと……」「別に。大事なのは今、私が北上さんと一緒に過ごしていることだもの。昔、僚艦だったからとか、私が先に沈んだからとか、そんなの北上さんへの愛にまるで関係ないことだわ」「……でも、でもまるゆは、もし会つたのが木曾さんじゃなくて大井さんだったら、大井さんを好きにならなくちゃ、って感じるんです」「……ほう?」



# 性器

「私、今からあんたにいやらしいことをするわ。私と北上さん……恋人どうしが夜にするようなことをね。あんたが私を好きになれるんなら、嫌な思いはしないわね？」  
 「は、はひ……いやだ、ごね？」  
 「おしっこ、してみせて。私と北上さんはセックスするとき、いつもおしっこをするのよ」「……」いくら尿に親和性の高い艦娘でも無茶振り……と思いきや、素直に腰を下ろしたまるゆは、震えながらもじよ……と放尿。ドックのタイルに薄黄色いおしっこが広がっていきます。……イヤじゃないの？ 本当に？ 「だって……これが正解、ですから。艦娘は、過去を裏切ってはいけないんです」「……この、おほか！」

# 放尿

「おしっこ、してみせて。私と北上さんはセックスするとき、いつもおしっこをするのよ」「……」いくら尿に親和性の高い艦娘でも無茶振り……と思いきや、素直に腰を下ろしたまるゆは、震えながらもじよ……と放尿。ドックのタイルに薄黄色いおしっこが広がっていきます。……イヤじゃないの？ 本当に？ 「だって……これが正解、ですから。艦娘は、過去を裏切ってはいけないんです」「……この、おほか！」

# 性交

北上さんにもごままでは、というくらい、おしっこで濡れたまるゆのあそこを激しく責めたてました。「今、生きている私たちはね、あのころ戦ったり沈んだり、生き残りたり鉄のカタマリとはもう違う存在なのよ。過去の亡霊じゃないの」「あ、あつ」「今、あんたは木曾が好きなんでしょう!? 木曾に抱かれないんしょう!? 誰に差けることなく、そのことを肯定して、誇りなさい!」「あ、あつ」「ぐちゅぐちゅぐちゅ」「き、きそ、さん……やっぱり……やだあ」「……そうよ。それでいいの」「……でも、おおいさんの、きもちいい……から、さいごまで、して……ください」「……これは木曾の指よ。いいこと。木曾が、あんたのちっちゃいおまんこ、食べてるの」「あ、あつ、ああ、やっあつあああ」

「大井姉さんのスケベ。変態」「……悪かったわよ。後日、真っ赤になった木曾に抗議されました。この顛末をどう聞かされたのやら。」「ロリコン」「オマエモナー」「……俺も馬鹿だった。あいつの気持ちに向き合わなくちゃいけないのに……」「で、今は、ちゃんと向き合ってるんでしょ?」「まあな」「セックスしてる? おしっこ飲んであげてる?」「……姉さんのそういうどこ嫌いだ」



これは艦装なんですって、と彼女が笑う。手にはいつもの水着。つまり、呂五〇〇——ろーちゃんはいま、生まれたままの姿で私の前に立っている。

二人で浜辺に来ていた。任務で海に出るのとは違って、休暇を利用して鎮守府近くの島を訪れているのだ。内海だからぐれ深海棲艦が出ることもない。

沈むことを何より恐れる艦娘だとして、別に泳いだり潜ったりすることまで嫌いなわけじゃない。むしろ体力づくりの一環として、水泳は奨励されてすらいる。私も泳ぎにそこそこの自信はあるし、ヴェールヌイの名を帯びてからはいつそう速くなった。ここはひとつ、あの金髪の潜水艦と勝負してやろうじゃないかということで、いつのまにか鎮守府になじんでいたろーちゃんを連れだした……という、自分をだますためのストーリーは、浜辺で彼女がホイホイと水着を脱ぎだしたときに粉碎されてしまった。

「どうしましたか、ヒビキ？ ろーちゃん、何か間違えた、ですか？」  
青い瞳をくりくりさせて、小首をかしげる全裸のろーちゃん。目のやり場に困る。

「いや……その、どうして水着を脱ぐのかなって？」

「だって」朗らかに、けれど至極真面目に彼女は言う。「艦装を着けて泳ぐのは、戦うときですって。ろーちゃんはヒビキとこへ遊びに来ています。遊ぶときは艦装、着けませんって」

両手を広げ、くるくると回る。  
「直接水に浸かるの、すっごく、グート……気持ちいいって！ ろーちゃんを受け止めてくれる、この星が、そんな気分！」

ヒビキも、いっしょに。ハダカで泳ぎませんか？  
そこだけはいくぶんはかんだろーちゃんに、私の下心は諸手を挙げて降伏した。

好きだから、連れだしたんだ。

初夏の浜辺を我が物顔に闊歩する、裸の駆逐艦娘と、裸の潜水艦娘。水をかけあったり、走ったり、転んだり、潜ったり、浮かんだり。ひとしきり、はしゃいで回った。

私たちはきつと祝福されている。絹糸のようなろーちゃんの髪を、いくつもの水滴が伝うのを見て、思う。だってこの、遠くドイツからやってきた金髪の少女は、こんなにもきれいで、こんがりとした灼けた手足も、真っ白なままの胸元も、その先端でわずかながら自己主張を始めた、薄紅色の部分も——

気がつく、ろーちゃんがじつと、私を見つめていた。私こそジロジロと、好色な視線を投げつけていたことに気づく。

「ヒビキ。ゼーア・シェーン」  
もつとも馴染みのある言葉を、口にする少女。私も、あえてかの国の言葉で返す。

「ローシエンカ。タカーヤ・クラスイーヴァヤ」  
お互い、クスリと照れ笑い。

「ろーちゃん……ここへ来てから、成長、しましたか？」  
「ん……背、伸びた」

「ほかに？」  
心も胸を張るようなくさきに、心臓が早鐘を打つ。

「……胸、少し膨らんだよね」  
「えっち」

そのときのろーちゃんの笑みは、きつと沈むまで忘れないだろう。

「そういう目で、ろーちゃんのこと見ていた、ですよ？」  
「……うん」

「いま、どんな気分？」  
「……」

「……ろーちゃんの、おまたも、ずっと見ていた、ですよ？」  
ポイラーが爆笑しそらだつた。

「ろーちゃんもね」

ふいにトーンが変わる。

「遊びながら、ヒビキをずっと見ていた、ですって。お胸やお尻に手があたってたりして、ドキドキして。だってヒビキはきれいで、ちよつとえっちで、こやうやって近くで見られて嬉しいなって……ヒビキ、どうした、ですか？」  
ポイラーが過熱していますか？」

「いや、ちよつと、待って」  
なんなのこれ。なんなのこれ。ハラショー。混乱する頭を必死に立て直そうとする。つまり何かい、ろーちゃんも、私に……私を？ そんな、どうして。

「どうして、」  
私なの。と投げかけようとした言葉が宙に消えた。チュウによって。

「えへ……エアステークス、ですって」  
もじつ、と後ろ手を組んで、舌を出すろーちゃんに、今度こそ私は打ち負かされた。

抱きあって、お互いの口をついばんで、乳頭に触れて。

こやういうときに何をしたらいいのかなんて、結局のところちよつともわかっていないけれど、お互いをこの上なく求めていることだけは、きつといま、この星で一番信じられることで。

それでも、熱と湿り気を帯びて、相手の指なり舌なりを待ち焦がれている核心にだけは手を出せず、私たちはぐるぐると遠回りに愛を確かめあうばかり。そろそろ、……そろそろ？

「ヒビキ……」  
私の胸元に頬を寄せ、ろーちゃんがひどく言いにくそうに身じろぎする。

「……ろーちゃん、おしっこ、したい、ですって」  
その単語が、痛烈な雷撃のように耳朶を打つ。何のことはない、洋上で仲間たちといっしょにすませるような日常の行為が、ひどく淫靡な香りをまとって立ち現れる。

「……ずつと、水の中にいたからね。私も、したい」  
「ねえ、ヒビキ」

ろーちゃんの柔らかい声が、扇情的に掠れる。

「いっしょに、しませんか」

ろーちゃんの斜めうしろから、左足を抱えあげた。身体を半分がた私にあずけさせる。

立ったまま、ということになる。どうしてこんな行動をとっているのか。私にも、きつと彼女にもわからない。ただただ、欲望に突き動かされている。美しさとか、尊さとか、そんな虚飾はもはや吹き飛び、二個の獐猛な性的主体がそこに在るだけだ。

「ヒビキ、」  
「いいよ。出して……ろーちゃんがおしっこするところ、私に見せて」

「んふっ」  
ろーちゃんの鼻から惱まじげな吐息が漏れ——いくぶん開いた秘所から、彼女の髪と同じ色の水流が放たれた。陽光を反射するいくつもの飛沫をまとい、ちよろちよろと音を立てて、排泄がつづく。気がつく、私の足の付け根からも尿が吹きだしていた。

二人の排水が、海へと還る。

私たちがこの、とてつもなく大きな流れの一部分だ。艦娘も人間も、きつとあの深海棲艦たちもそうなのだ。みんなまとめて、命在ることを赦されている。傷つけあい、沈めあうことまで

もが肯定され、祝福されている。そのなかで、私は姉妹たちに出会い、司令官に出会い、そしてろーちゃんに出会った。彼女もまた、さまざまな出会いのなかで、私を見つけたのだらう。

私は、私に抱かれておしっこをするこの少女を、どうしようもなく愛していることを自覚した。

何故だかひどく泣けた。見ると、ろーちゃんも大粒の涙をこぼしていた。

私たちは、放尿しながら、幸せだった。

おしっこれくしょん 潜水艦編  
Combined Fleet Girls Collection FAN BOOK Vol.11

発行日 2015年09月20日

発行サークル LUNATIC PROPHET  
web <http://circle.lunaticprophet.org/>  
pixiv id=92903

発行人 有村悠 Yuu Arimura  
e-mail [edgeoftheseason@gmail.com](mailto:edgeoftheseason@gmail.com)  
twitter id=@y\_arim

印刷所 株式会社サングループ  
web <http://www.sungroup.co.jp/>



produced by Lunatic Prophet  
2015.09.20.

排水を急いで!  
漏らしちゃう……!